



写真2 ヤギの乳搾り。命名は、ヤギの外形的特徴によることがおおい。こちらは、赤毛なのでオラージャー。赤＝オラーンが由来だ。ムンフーエグチが名前を呼ぶと、ヤギは自分から乳を搾ってもらいにやってくる（ホブド県ドート郡フバエルチル村ヘルツィーン・アム、写真 2018/08/20、録画 2019/08/31：QR コードから YouTube に飛べます）

→写真1 西モンゴルの山岳地帯の放牧風景（モンゴル国ホブド県ドート郡フバエルチル村ノールト、2018/08/03、筆者撮影）〈以下、撮影者はすべて同じ〉



モンゴルの乳しぼり —— 牧畜民と家畜の心は通うか

上村 明

乳しぼり

家畜の乳しぼりは、牧畜のなかでも重要で特殊な作業だ。子が飲む乳をヒトが横取りして利用する。そのために母と子を分離し、搾乳のあとで再統合する。分離の方法には、ロープ（写真3・4）や鼻串（写真5）、口枷（写真6）といった道具を使う方法もあるし、隣の世帯と子や母を交換し、昼間母子をべつの群れのなかで放牧する空間的な分離方法（写真7・8）もつかわれる。

母と子の分離と統合の過程で、実際の母子の関係だけでなく、母を失った子ヒツジと子を亡くした母ヤギの異種どうしの組み合わせもつくられる（写真13・14）。乳しぼりという作業をつうじて、ヒツジ・ヤギの母子関係は構築されるのである。そして、ほかの牧畜民世帯との協力関係も構築される。

家畜を群れつまりマス（集団）としてあつかう毎日の放牧のやりとりとはちがいが、乳搾りは牧畜民が家畜を個としてあつかう、ヒトと動物の一对一の作業だ。それだけ交渉は濃密になる。ヒトは、放牧の時より頻繁に家畜にかけ声をかける。

かけ声

モンゴルの家畜のかけ声は、大きく分けて三通りに分けられる。家畜をヒトから遠ざけるかけ声（写真16）、近づけるかけ声（写真13）、注意を喚起するかけ声である。

日本語では「家畜」で括られる動物は、モンゴル語では牧畜の対象となる草食で群居性の家畜を「マル」、その他の家畜を「テジェーウエル・アマタン（飼養動物）」とはっきり区別する。牧畜には、牧畜民と家畜（マル）との適度な距離が必要だ。家畜になつて野生よりヒトにちかい関係になったとしても、イヌやネコのようにちかづきすぎてもいけない。ヒトをおそれるからこそ群れをつくり放牧が容易になる。家畜は群れのなかに身を隠して自分を守ろうとする。かけ声によるやり取りは、ヒトと家畜との関係そのものを構成するのだ。

モンゴルの牧畜の場合、家畜のかけ声は、一部かきなるものの家畜の種類によってことなり、ヒトから遠ざけるかけ声、ヒトへの警戒感をやわらげ、ちかづけるかけ声、注意を喚起するかけ声、それぞれおおくて二・三種類である。

強度や抑揚をかえたりくり返すことはあっても、音声の組み合わせを自由に変えてかけ声をかけているわけではない。ヒトどうしの言語における単語のように、音声のセットとしてのかけ声は固定されている。しかし、語を組み合わせて文を構成することはない。コーンのいう「種間ビジン言語（Trans-species Pdin）」（Kohn 2007, cf. Fijn 2011 Chap.5）である。注意を喚起するかけ声は、家畜全部に共通して主に「ハイ」を用い、歯笛も使われる。

命名による呼びかけと応答

乳しぼりの際には、ヒトにちかづけるかけ声を多用するだけでなく、わたしのホブド県のホストファミリーでは、家畜に名前をつけることもある。

なかでもヤギは、自分の名前が呼ばれると自分からすすんで乳を搾られにやってくる写真2。命名は、ヤギの外形的特徴によることがおおいが（写真2・17）、時には性格の特徴によることもある。ヤギの名前は、「チ、チ、チー」というヤギのヒトへの警戒心を解きヒトにちかづけるかけ声といっしょに呼ばれる。呼びかけと搾乳を繰り返すうちに、自分の名前を呼ばれたヤギは呼びかけに応答し自分から搾乳してもらいにくるようになる。これを「名前を取る・受け入れる（ネル・アバフ）」と呼ぶ。

呼びかけに応答しない個体ももちろんいる。そんなヤギには、名前で呼びかけるのをやめて、首にロープをつけて引張ってきて搾乳する（写真18）。呼びかけに応答する個体でも、「ヤギに近い」（搾乳の作業をいつもしている）ヒトの呼びかけでないと応答しないことがふつうだ。名前の呼びかけとそれへの応答も、搾乳作業の繰り返しの中で構築されていくのである。そして、対等なヤギとヒトとの交渉は、モンゴルの場合、アフリカの例（波佐間二〇一五）に比べて限定的であるし、搾乳しなくなると消滅してしまう。

功利主義と家畜への「愛」のあいだ
わたしの観察した、自分の名前を認識して

り取りをつづけるイヌとヒトの双方を、「伴侶種」と位置づける。犬「愛」家として知られるハラウェイだが、「動物の権利」運動に対する批判の立場をつよく支持し、存在は役割によって構成されると説く。これは関係主義の考え方だ。

モンゴルの牧畜民も、乳や肉として家畜の肉体を自分の体内にいれるだけでなく、家畜とさまざまな物質をやり取りしている。家畜の乾燥した糞が粉塵として舞うなかでの作業は当たり前だし、とくに搾乳は濃厚な関係による交渉の作業だと書いた。直に家畜の乳房をにぎって搾る搾乳の作業では、さまざまな細菌やウイルスが交換される。この記事の写真やビデオに登場するムンフーエグチは、長年ヤクの搾乳に従事してきた結果、ブルセラ症にかかって膝の関節の手術をした。

ムンフーエグチと母ヤギたちもその意味で「伴侶種」といえる。長い共棲と共進化の遺産をうけつぎ、物質レベルから音声によるやりとりまであらゆるレベルの交流を繰り返している。しかし、その交渉は牧畜の作業をつうじてのもので、それゆえ関係には濃淡があり、消えてしまうこともある。ムンフーエグチは、おなじ母ヤギに前の年とはちがう名前をつけて呼んでいたの、それを指摘すると「あそつうだった」と答えた。

心は通うか？

牧畜民と家畜の心は通うかという、そうだと答えよう。家畜はかけ声に応え、ヤギはちゃんと自分の名前を認識するからだ。ただし、ヒトどうしのように音声のセットを複雑

に組み合わせる細かい事柄を伝えられるわけではない。ヒトの側からすると、自分たちの言語のほんの一部分の機能を使っているにすぎないし、動物の側からしても自分たちの感覚の能力を生かしたもつと合理的な方法がもしかしたらあるかもしれない。たまたまヒトと動物のお互い重なり合うインタース페이스を利用してやり取りしているのだ。それに、ヒトどうしても自分の言ったことが「そのまま」相手に伝わるわけでもない。十分な理解がなくとも、また意図が相手にことなつて伝わってしまった、コミュニケーションは成り立つ。全面的な理解は不可能だ。ぎやくに、「伴侶種」がそうであるように、ヒトと動物のあいだでも、ヒトどうしより深いつながりは可能である。牧畜民と家畜とのあいだも部分的なつながりでつながっていて、そこでは心は通じているのである。

参考文献

- Fijn, N.
2011 *Living with Herds: Human-Animal Coexistence in Mongolia*. Cambridge University Press.
ハラウェイ、ダナ
二〇一三 『伴侶種宣言…犬と人の「重要な他者性」』以文社。
波佐間逸博
二〇一五 『牧畜世界の共生論理…カリモジョントドススの民族誌』京都大学学術出版会。
Kohn, E.
2007 *How dogs dream: Amazonian natures and the politics of transpecies engagement*. *AMERICAN ETHNOLOGIST*, Vol. 34, No. 1, pp. 3-24.



写真 12 母ヒツジの乳を吸う子ヒツジ。母は子のお尻の匂いを嗅いで自分の子と認識する。乳を飲みすぎたり腹を冷やして下痢をすると、お尻の匂いが変わってしまうので注意が必要だ。乳を吸っているあいだ、子ヒツジの尻尾は激しく左右にゆれる。乳を吸おうとしない子畜がいると、牧畜民は、尻尾をゆすって、乳を吸うようにうながす（ホブド県ドート郡フフベルチル村ハルダワーニー・アム、1996/03/14）



写真 13 母の乳の量がすくない子ヒツジと子を亡くしたヤギのベアリング。ヤギは子ヒツジのお尻のにおいをしきりに嗅いでいる。QRコードのリンクは、子を受け入れない母畜に歌いかける歌「トイゴー」。ヒツジの警戒を解き呼びよせるかけ声「ブルル」も聞かれる（ホブド県ドート郡フフベルチル村ハルダワーニー・アム、写真 1996/03/31、録画 1996/03/29）



写真 14 母ヤギは、子ヒツジを自分の子として受け入れた。もうヒトの介入の必要はない（ホブド県ドート郡フフベルチル村ハルダワーニー・アム、1996/04/04）



写真 9 ヒツジ・ヤギの放牧の途中でヒツジが生まれた。黄色い羊膜が身体にまとわりついている。呼吸ができるように鼻面と、脚も手でぬぐってやり、母ヒツジに羊膜をよくなめさせる。羊膜にはホルモンが含まれていて、なめることによって乳がよく出るようになるのだという。牧夫は布の袋を持たされ、ゲルに近ければそれに子畜を入れて群れをそのまま捨ておいてすぐにゲルにもどる。今回はいっしょに来たツェンゲーに持ち帰らせた（ホブド県ドート郡フフベルチル村ハルダワーニー・アム、1996/04/03）



写真 10 ヒツジ・ヤギの子はすこし大きくなると親と同じ群れにして屋間牧地に出される。はやく自分で草を食べるようにして乳ばなれを促すためだ。そのなかにいつも群れから遅れる子ヒツジがいた。放牧に出る前に、群れから取り残されることのないように注意しろと言われたが、夕方もどつてくるとその子ヒツジがいない。屋間歩いた場所をたどるとタカにつつかれて死んでいるのを見つけた。白い毛並みに鮮やかな赤い穴がぽっかり開いている。ホストファミリーの妻オトゴーからひどく叱られた。子畜は死と隣り合わせだ。群れから離れることは、即、死を意味する（ホブド県ドート郡フフベルチル村ハルダワーニー・アム、1996/04/06）



写真 11 生まれたばかりの子ヒツジと子ヤギは、寒さから守るため、ゲルに入って左手に張られたロープにつながれる。この子ヒツジたちには、さらに身体が冷えるのを防ぐため、厚い「腹巻」が着せられている（ホブド県ドート郡フフベルチル村ハルダワーニー・アム、1996/04/07）



写真 6 こちらは、タイヤのチューブを鼻面にはめられたヤクの子。夕方方の乳しぼりの前から翌朝の乳しぼりまで、子ヤクはゲルの前の地面に張られたロープにつながれる。こうすると、子は自由に動きまわることができず、母の乳を吸うことができない。しかし、この生まれたばかりの子と母は、うまく立ちまわって、乳を飲んでしまう。そこで、オートバイのタイヤを切りとったチューブを鼻面にはめられた。こうすると、さすがに乳を飲むことはできない（ホブド県ドート郡フフベルチル村ノールト、1993/07/27）



写真 7 母と子を分離する方法には、母畜が自分の子以外に授乳させないという性質を利用するものもある。それぞれの世帯のヒツジ・ヤギ混成群から子畜あるいは母畜だけを抜き出して、相手の群れのなかに入れる。このようにすると群れのなかには自分の子がいないので、授乳できず夕方乳が搾れる。この作業には、ふたつの世帯の営地のあいだにある程度の間隔があることが必要だ。あまりに遠いと交換が面倒であるし、あまりに近いと2つの群れがたやすく混ざってしまう。この距離とこの距離にある世帯をサーバルトという。

写真では、4世帯の所有するヒツジ・ヤギが2つの群れを構成し、ヤギの母畜だけを抽出しようという群れに入れている。牧地からもどった後の夕方、預けた群れの中から自分の母ヤギを抜き出して搾る。その目的は、乳を利用することだけでなく、母ヤギを負担のおおきい授乳から解放し休ませることもである。

世帯ごとに1本のロープを使って、それぞれの所有する母ヤギの頭を交互にしぼり、搾乳する。日数が経つと母ヤギは慣れ、追い回す必要はなくなり、おおくの母ヤギが自分からつなげられにやってくる。

こうして、子に授乳させず、ヒトが乳を搾ると、だんだんと乳の量が減っていき、ほとんどの母ヤギの乳が出なくなったころ、彼女たちは元の群れに戻される（ホブド県ドート郡フフベルチル村ノールト、2018/08/01）



写真 8 搾乳後、ロープは先端を引っばるとすると解ける（ホブド県ドート郡フフベルチル村ノールト、2018/08/01）



写真 3 モンゴル西部の高原のウマの乳しぼり。彼方に見える山の向こうは中国新疆だ。この年7月上旬の早朝、牝ウマが子ウマとともに集められた。そして、馬乳酒を作るための搾乳を開始する儀式がはじまった。地面に打たれた杭にロープが張られ、そこに子ウマがつながれる。杭には儀礼用の布が巻かれ、香がたかれて（左下隅）浄められた。そして、お茶だけの簡単なお祝いが行われた（モンゴル国バヤンウルギー県ボルガン郡ホジルト村マート、1996/07/04）



写真 4 馬群のなかでその年最初に生まれた子ウマは、顔に乳脂を塗って聖別される。生まれてはじめてロープにつながれた子ウマは、なんとかロープを振りほどこうと必死に暴れる。子ウマをこうしてロープにつなぐと、母ウマはそこから離れることはない。日が経つにつれて子ウマはロープに慣れ暴れなくなる（モンゴル国バヤンウルギー県ボルガン郡ホジルト村マート、1996/07/04）



写真 5 このヤギ、二歳になっても乳ばなれせず、生まれたばかりの弟や妹をさしおいて、ちゃっかり母の乳を飲んでしまう。それで、鼻に木の串をさされた。乳を飲もうとすると、お腹に串の先端があたるので、母畜は乳を飲ませない（ホブド県ドート郡フフベルチル村ハルダワーニー・アム、1996/03/27）

第3部 遊牧を生きる



写真 17 このヤギは、「まだら」なのでアラグジャー（アラグ＝まだら）
（ホブド県ドート郡フフベルチル村ヘルツィーン・アム、2018/08/07）



写真 15 なかには自分の子を受け入れない母畜もいる。とくに初産
の3歳畜は、受け入れない割合がたかい。その場合は、実の母と子で
もこのようにヒトがベアリングしてやる必要がある（ホブド県ドート
郡フフベルチル村ハルダワニー・アム、1996/03/31）



写真 18 呼びかけに応答しないヤギ。ヤンジマーがうえに乗って搾
乳のあいだ動かないようにする（ホブド県ドート郡フフベルチル村
ヘルツィーン・アム、2018/08/07）



写真 16 谷の北側の峠の向こうに追った牦牛の群れ。
この群れが深夜営地のちかくにもどって来た。このまま
だと営地のまわりの牧地や泉が踏み荒らされてしまう。
ムンフーエグチがいそいで寝床から起き出し、「ハッジ」
というかけ声をかけながら、川上に追いたてる。「ハッ
ジ、ホッジ」はヤクを含むウシを追うかけ声だ（ホブド
県ドート郡フフベルチル村ヘルツィーン・アム、写真
2018/08/25、録音 8/26）



写真 19 西モンゴルの山岳地帯の放牧風景。乾いた牛糞を投げて群れを追う
（モンゴル国ホブド県ドート郡フフベルチル村ノールト、2018/08/09）